

年間第十四主日

2021.7.4

マルコ 6・1 - 6

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音は、イエスが弟子たちと一緒に、お育ちになられたナザレにお帰りになって、安息日の会堂で人々に教えておられる、そのような場面です。

イエス様の教えを聞いたナザレの人々は、「この人は、いったいこのような知識をどこから得たのだろうか」、そのように驚いたということです。

イエス様を信じるということはどういうことなのか、先週の福音（マルコ 5・21 - 43）と今日の福音を照らし合わせて、改めて考えてみると、先週の福音では、12年間も患っていた女性が、人には決して知られたくないその病気を隠して、イエス様のお服の房にでも触れればきっと癒していただける、そのような信仰を持ってイエス様に近づきます。「あなたの信仰があなたを救った」。イエス様はそのように言われます。会堂長のヤイロの大切な娘が死んでしまったときにも、イエス様は彼に、「ただ信じなさい」、そのように言って、死んでしまったその娘を彼に返し与えてくれたということが語られていました。

わたしたちが信じているイエス様とはどのようなお方なのか、イエス様を信じるということがどういうことなのか、先週の福音と今日の福音を合わせて、改めて味わってみたいと思います。

ナザレの人々は、自分たちが知っているナザレで育った大工の息子イエス様が、どこからそのような知恵に満ちた、人の心を打つ言葉を得たのか、そのように思いました。自分たちが知っているイエス様が今自分たちに語られているお言葉を、神様からのお言葉として受け入れることができなかった。「知っている、よく知っている、われわれの中にいたその人だ」、そのような思いが、イエス様を神様のもとから来られた、神様のみ言葉そのものであるお方として受け入れることができなかったということです。

わたしたちも、改めて、わたしたちが信じている信仰を、自分が信じていると思っている信仰を、今日のイエス様のお言葉に促されて改めて反省してみたいと思います。ずうっと長い間イエス様を信じる者として過ごしてきたはずなのに、その思いがかえって、「わたしたちが昔からの信者だ」、そのような思い

の中で、今新しくイエス様を信じ始めようとしている人々のみずみずしい心に遠く及ばないものになってしまっていないか、そのようなことを反省し、改めて、イエス様を信じる信仰は神様の恵みなのだ、わたしたちの心に神様が注いでくださる恵みによって初めて可能とされたのだ、そのことを今日のミサの中で改めて振り返り、信仰を新たにする恵みを願って、共に祈りたいと思います。